

室内環境学会環境過敏症分科会および日本臨床環境医学会環境過敏症分科会
第4回合同研究会オンライン会議「Withコロナ時代に、環境過敏症発症
患者の発症予防を目指して(その4)」の報告北條祥子^{1,2)*}, 柳田徹郎³⁾, 星野陽子⁴⁾, 岩崎由美子⁵⁾, 鈴木高弘⁶⁾, 水越厚史⁷⁾, 黒岩義之⁸⁾¹⁾東北大学大学院歯学研究科 〒980-0875 宮城県仙台市青葉区青陵町4-1²⁾尚絅学院大学 〒981-1295 宮城県名取市ゆりが丘4-10-1³⁾東京大学大学院工学系研究科 〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1⁴⁾足利市立北郷小学校 〒326-0061 栃木県足利市田島町1⁵⁾生活環境と健康研究会 〒981-0942 宮城県仙台市青葉区貝ヶ森3-7-28⁶⁾日本調剤医療連携推進部 〒980-8578 東京都千代田区丸の内1丁目9番1号 グラントウキョウ ノースタワー37階⁷⁾近畿大学医学部環境医学・行動科学教室 〒589-8511 大阪府大阪狭山市大野東377-2⁸⁾帝京大学医学部附属溝口病院 〒213-8507 神奈川県川崎市高津区二子5-1-1The Report of Symposium "Aiming to Prevent the Onset of Patients with
Environmental Hypersensitivity During the Corona Era (Part 4)"Sachiko HOJO^{1,2)*}, Tetsuo YANAGIDA³⁾, Yoko HOSHINO⁴⁾, Yumiko IWASAKI⁵⁾,Takahiro SUZUKI⁶⁾, Atsushi MIZUKOSHI⁷⁾ and Yoshiyuki KUROIWA⁸⁾¹⁾Tohoku University School of Dentistry, 4-1 Seiryomachi, Aoba-ku, Sendai, Miyagi 980-0875, Japan²⁾Shokei Gakuin University, 4-10-1 Yurigaoka, Natori-shi, Miyagi 981-1295, Japan³⁾Tokyo University, 7-3-1 Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo 113-8656, Japan⁴⁾Kitagou Elementary School, 1 Tajima-cho, Ashikaga-shi, Tochigi 326-0061, Japan⁵⁾Living Environment and Health Study Group, 3-7-28 Kaigamori, Aoba-ku, Sendai, Miyagi 981-0942, Japan⁶⁾NIHON CHOUZAI Co., Ltd., 37F GranTokyo North Tower, 1-9-1, Marunouchi,

Chiyoda-ku, Tokyo 100-6737, Japan

⁷⁾Kindai University Faculty of Medicine, 377-2 Ohno-higashi, Osakasayama-shi, Osaka 589-8511, Japan⁸⁾Teikyo University School of Medicine, Mizonokuchi Hospital, 5-1-1 Futago, Takatu-ku,

Kawasaki 213-8507 Japan

Key words: 環境過敏症(Environmental hypersensitivity), 室内環境(Indoor environment), 発症
予防(Prevention of onset), 病態解明(Elucidation of pathology)

1. はじめに

2021年12月26日にオンラインにて、室内環境学会環境過敏症分科会、日本臨床環境医学会環境過敏症分科会、および、生活環境と健康研究会共催の合同研究会オンライン会議「Withコロナ時代に、環境過敏症発症患者の発症予防を目指して(その4)」が開催された。本会議は3部構成(基調講演、話題提供、総合討論)で行われ、20名の参加(写真1)があり、大盛会の内に終了した。本会議での報告は、環境過敏症発症の発症予防に加え、コロナ禍における室内環境の重要性やコロナ対策についての内容であった。

室内環境学会の会員の方々に役に立つ情報と考えられるため、以下にその概要を報告する。

主催：室内環境学会・環境過敏症分科会、日本臨床環境医学会・環境過敏症分科会、生活環境と健康研究会

企画：北條祥子(主催者代表)、黒岩義之(主催者副代表)、水越厚史(世話人)

開催日時：2021年12月26日13時00分-16時00分

場所：オンライン(Zoom)：担当 鈴木高弘(日本調剤医療推進部)

*Corresponding author (責任著者) Email: hojo@shokei.ac.jp, Tel: 022-278-0628

受付日：2022年2月14日 (Received: 14 February 2022)

受理日：2022年2月28日 (Accepted: 28 February 2022)



写真1 第4回オンライン会議の参加者の集合写真

2. 開会の挨拶

北條祥子(主催者代表)

新型コロナ禍では消毒剤の噴霧やテレワークの急増により、化学物質曝露や電磁曝露の機会が増えており、日本でも、環境過敏症患者の急増が危惧される。環境過敏症のような種々の要因が複雑に絡みあって発症すると推定される健康障害の病態解明・発症予防対策の検討は、幅広い分野の研究者が情報交換、共同研究を行いながら、発症予防対策を模索する以外にない。10年前に、幅広い研究者で構成された「生活環境と健康研究会」を発足させ、年2回(室内環境学会学術集会時と日本臨床環境医学会学術集会時)開催してきて、今回で21回目であり、その内オンライン会議は4回目となる。今回は、新たな取り組みとして、第1部基調講演や第2部話題提供の他に、第3部総合討論として、参加者全員に、自分の専門分野からみた環境過敏症発症予防の今後の展望について、①事前に資料を準備してもらい、②一人当たり3分間の話題提供していただき、③後日、その内容を原稿として提出していただき纏めるという企画とした。

3. 第1部 基調講演 13:05-13:40

座長：吉野 博(東北大学名誉教授)

外部講師の**林基哉氏**(北海道大学教授)は、「新型コロナウイルス感染症のクラスター感染と空調換気性状」と題して、“新型コロナウイルス感染者からの飛沫・エアロゾルはその粒径によって挙動が異なり、微小飛沫に関しては気流移動、室内拡散による浮遊飛沫感染が生じている。また、クラスター感染発生

空間の調査結果より、病院、コールセンター、アイスアリーナなどにおいて、換気装置の老朽化やメンテナンス不足、建物構造などを原因として換気不十分となっていたことが確認されている。一方、住宅においては常時換気装置の設置が建築基準法で定められた以降も、室内化学物質濃度は減少していないことが統計的に確認されており、室内化学物質についても解決すべき課題は残っている”と、基調講演を行った。時宜を得た話題であり、参加者との活発な質疑応答がなされた。

4. 第2部 5名のメンバーからの話題提供

13:40-14:20 座長：黒岩義之(帝京大学)、水越厚史(近畿大学)

1) **中里直美氏**(前国際医療福祉大学熱海病院薬剤師)は、「薬剤師からみた環境過敏症・脳脊髄液減少症患者の感覚・免疫過敏に関する調査」と題して、“脳脊髄液減少症は4つの中核症状(自律神経症状、情動・認知症状、疼痛・感覚過敏症状、免疫過敏症状)が個々の患者で重層的に現れる。また、本症と筋痛性脳脊髄炎/慢性疲労症候群、化学物質過敏症、子宮頸がんワクチン副反応、COVID-19慢性後遺症には類似性があり、視床下部性ストレス不耐・疲労症候群といえる”と話題提供した。

2) **近藤哲哉氏**(関西医療大学保健医療学講座教授)は、「心療内科医からみた環境過敏症患者の現状と今後の展望」と題して、“化学物質過敏症患者のよう

に訴えが多い患者に対して、「嘘をついている(詐病)」と、誤解されることがある。しかし、中枢神経感作症候群の病態となる可能性が考えられるものは詐病でなく、①身体感覚増幅(身体感覚が過敏になっている)、②破局的思考(身体の不快感を気にしだすとなかなか止まらないという心理状態)、③ゲーム(罪悪感の払拭や、注目、愛情、同情を得る目的のためにパターン化すること)である可能性があるため、問診票などを用いて注意深くみながら診断している。治療としては針灸などの東洋医学が有効だと考えて治療している。”と話題提供した。

3) **柳田徹郎氏**(東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻・修士課程2年)は、「アレルギー患者や、環境過敏症患者にも配慮した「まちづくり」を目指して、民間の賃貸住宅における室内空気質を原因とした健康リスクについての考察」と題して、“民間賃貸住宅では健康リスクの高い賃貸仕様の内装材が用いられている。室内環境に配慮した賃貸物件の市場性を検討するため、入居者の選好調査を実施予定である。併せて、塩化ビニール製壁紙への漆喰塗装により、健康リスクが指摘される2エチル1ヘキサノールが発生することが複数の計測データから確認された”と、話題提供した。

4) **小山桃花氏**(宮城教育大学家庭科専攻4年生)は、「新型コロナウイルス感染拡大による大学生の生活スタイルの変化と健康影響に関する実態調査」と題して、“卒業研究で、調査票を用いて、宮教大生のコロナ前(2020年2月以前)とコロナ後(2020年3月以降)の生活スタイルと健康状態を調査し、Man-WhitneyのU検定で比較した。その結果、有意差がみられたのは、生活スタイルでは、①パソコンやスマホの使用時間の増加、②柔軟剤使用率の増加、③香料入り化粧品の使用率の増加であった。また、QEESIのQ5日常生活障害(仕事学校、社会活動、旅行ドライブ、趣味、家族関係)が有意に増加していた。本結果を基に、環境過敏症にならないための大学生の生活習慣を提案してゆきたい。”と、話題提供した。

5) **上田厚氏**(NPO法人アジアヘルスプロモーションネットワーク・理事長、社会医学)は、「環境過敏症患者のエコロジカルな室内環境や生活スタイルに学ぶ」と題して、“社会医学的な解析結果より、①過

敏症患者はエコロジカルなライフスタイルを実践する力と、住民への発信力を獲得している。②住民への発信は臨床的治療を補完し、発症者のQOLを保持増進する。③過敏症患者の組織化は患者の存在感を高め、未発症者のエコロジカルなライフスタイル実践意欲を醸成する、④過敏症患者の社会的ストックとしての意義は大きく、それを基盤にした対策が政策的に実施されるよう住民、企業、自治体へ働きかけるべきと考える。”と、紙上参加により話題提供した。

5. 第3部 総合討論 14:20-16:00

座長：北條祥子(東北大学)

参加者全員が、“各専門分野からみた環境過敏症発症予防に関する今後の展望”について、意見を発表し、その発表内容を、各自、文章で提出した。以下に参加者の所属および専門分野(敬称略)を示した。1)岩崎由美子(生活環境と健康研究会、社会科学)、2)上田厚(NPO法人アジアヘルスプロモーションネットワーク・理事長、社会医学)、3)浦野真弥(有限会社環境資源システム総合研究所、環境工学)、4)小倉英郎(医療法人高幡会大西病院院長、小児科/アレルギー感染学/環境医学)、5)角田和彦(かくたこども&アレルギークリニック院長、臨床環境医学/アレルギー)、6)黒岩義之(帝京大学溝口病院脳神経内科・脳卒中センター、客員教授・センター長、脳科学/自律神経学)、7)小山桃花(宮城教育大学家庭科専攻4年)、8)近藤哲哉(関西医療大学保健医療学講座教授、心身医学/東洋医学)、9)菅原正則(宮城教育大学教育学部家庭科教育講座・教授、建築学)、10)鈴木高弘(日本調剤医療連携推進部・課長、臨床薬学/臨床栄養学/感染制御学)、11)平久美子(東京女子医科大学東医療センター麻酔科講師、麻酔科)、12)出村守(札幌でむら小児クリニック・院長、小児科/アレルギー科/臨床環境医)、13)寺田良一(明治大学文学部・教授、環境社会学)、14)中里直美(脳脊髄液減少症研究会、薬学)、15)林基哉(北海道大学工学研究院教授、建築環境/建築衛生)、16)星野陽子(足利市立北郷小学校・教諭、特別支援教育)、17)北條祥子(尚絅学院大学名誉教授/東北大学大学院歯学研究科研究員、疫学/環境医学/薬学)、18)水越厚史(近畿大学医学部環境医学・行動科学教室・講師、環境医学)、19)柳田徹郎(東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻・修士課程2年、都市工学)、20)吉野博(東北大学名誉教授、建築環境

工学)。

6. 閉会の挨拶

主催者副代表 黒岩義之

環境過敏症の予防で最も重要なのは、既知の発症トリガーストレスへの暴露を解消することである。予防標的となる環境過敏症の原因に共通するのは「脳に対する強いストレス」という点である。例えば、化学物質のような脳に対する毒性ストレス、交通事故のような脳に対する物理的外傷ストレス、強い恐怖体験のような脳に対する心理的外傷ストレスがあげられる。因果関係が既に明確にされているネオニコチノイド、グリホサート、ホルムアルデヒドのような原因に対しては、特にきちんとした社会的啓蒙と行政的対処が必要となることは言うまでもない。環境過敏症の既知の原因に対する社会的対応から突破口を求めようとしているのが、寺田良一先生の社

会学的なアプローチであり、学問に裏付けられた熱心な取り組みに感銘を受けた。角田先生から化学物質過敏症の瞳孔異常という自律神経障害を示唆する重要なお発言があった。近藤先生から不安等の情動障害について詳しいレクチャーがあり、勉強になった。他にも小山桃花さんの大学生の環境過敏に関するご発表、柳田徹郎先生の環境と健康に関わる不動産賃貸や建築条件など実社会問題に関するご発表など、環境過敏症をリアルワールド(現実の世界)の問題として取り組む発表内容をたくさん聴けたことは、今回のオンライン会議の大きな成果であり、大きな意義であると考えたい。環境過敏症の未知なる病態を解明すべく、本会議メンバーひとりひとりの現場研究を積み重ねることが最も重要であり、皆様と第5回目のオンライン会議でお会いできることを楽しみに閉会の挨拶とする。